CHICKEN JEORGE LIVE SCHEDULE AND YOURS

1983

4/1 〜 4/30

2-17-15 SHIMOYAMATE DORI CHUO-KU KOBE
IKUTA JINJYA NISHIMONMAE NEW EMPEROR BILD.2F
CALL 078 392—0146 P.M. 5:00—A.M. 1:00

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
					1 是方バンド G. 是方博邦 B. 田中章弘 D. 多田牧男 Key. 乾 裕樹 Sax. 春名正治	2 長江健次
3 金森幸介 & The Mellow ゲスト 有山淳司	4 ITACHI	5 寺島まゆみ	6 「アダル・キッズ・ジョイント・LIVE!!」 伊藤銀次 VS. NOBODY	7 UGUISS VS FREERIDE	8 James Blood Ulmer （入替なし） 前売中 ¥3,800 当日 ¥4,000	9 近田春夫 & VIBRA・TONES
10 安全地帯 (井上陽水サポートバンド) VS. POCO・POCO	11 宮永尚美	12 羅麗若	13 ヴァージン VS ㊤ よいしょ！	14 中原めいこ	15 AFRICA VS. おっしょい	16 大江千里
17 第4回オーディション 1:00〜3:30 小田陽子 7:30〜	18 角松敏生	19 エイプリル・バンド VS. MISSTY	20 桑名晴子 & September Blue	21 ホン・ヨンウン	22 三十三間堂	23 石黒ケイ
24 Be・Bops VS. Seaside Breakers	25 4−D VS. メトロファルス	26 円道一成WITH ミッドナイト・スペシャル	27 THE WOOD	28	29 BAD SCENE VS. ピアス	30 増田俊郎 & BLUE

CHICKEN JEORGE'S LIVEPICKS

4月2日 長江健次

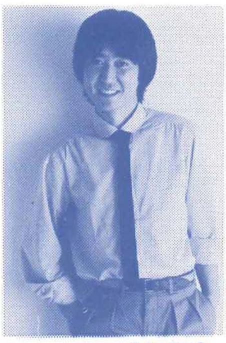
いわずと知れた
"イモ欽トリオ"のフツオ君デス
ヨロシク!!

"ADULTS・KIDR JOINT LIVE"

4月6日 伊藤銀次 VS NOBODY

伊藤銀次と NOBODY のジョイントは、1983の象徴的な出来事になりそうです。相変らずのビートルズ人気、そして、次々とデビューする MERSEY−BEAT グループ。今年以降は、NEW WAVE として、日本のポップスの主流になりそうな傾向が出てきました。50's ブームから、60's ブームへと徐々に移向しています。この流れは変えようもありません。その中心になっていくのは、伊藤銀次と NOBODY であるのを予知したかのように、彼等のもとに、現在、数多くのミュージシャンが集まりつつあります。そして、この集合体は、今年の日本の音楽シーンの中で、一つのポイントになると思われます。

伊藤銀次と NOBODY を中心としたムーブメントを、MERSEY−BEAT−GROUP と呼ぶより、あえて、ADULT−KIDS−GROUP と呼びたいと思います。それは、音楽を独立したものとして捉えるより、精神的な支柱として、MERSEY−BEAT を捉えている男達と考えたいからです。伊藤銀次と NOBODY。この1人と1つのグループ。そして、ここに集まってくる数多くのミュージシャン達に御注目下さい。



4月8日 JAMES BLOOD ULMER

パンク・ニュー・ウェイヴからファンクへ！

'70年代後半のパンク・ロックの潮流は、'80年代に入ってファンクの要素を持つ一派を生んだ。トーキング・ヘッズ、ピッグ・バッグ等ファンクとラテンの要素を、採り入れたその流れは、ヘアカット100、ABC等ブリティッシュ・ファンク、と呼ばれるようになっている。一方、パンクに刺激されたジャズ、ジャズに刺激されたニュー・ウェイブが、微妙な協調を持って、ジャズ・パンクとも言うべき、アヴァンギャルドな方向性を示し、まさにジャンルを無視した新しい波となりつつある。

そういったジャズ・ファンク、パンク・アヴァンギャルド・ムーヴメントの頂点に立ち、ギタリストとしてカリスマ的支持を受けているのが、ジェームス・ブラッド・ウルマーである。

4月13日 ヴァージン VS

プロフィール

ヴァージンVSのVは"VISUAL"のV。ヴァージンVSのSは"SONIC"のS。つまり、見て、聞いて楽しめる音楽ということ。ヴァージンVSのステージは、不思議の国のフェスティバル。夢の世界へ、ノンストップ急行。

ヴァージンVSが結成されたのは1979年のクリスマスのころ。リードヴォーカルのA児を中心に、三々五々、どこからともなく不思議の国のメンバーが集ってきた。彼ら7人、今の音楽シーンを塗りかえてしまおうと、夜な夜な秘密の会合を持ったりしている。

"ブリキ・ロック"をテーマにくりひろげられるヴァージンVSのステージは、底ぬけに楽しくファンタスティック。ただようシンセサイザーと哀愁すべるA児のヴォーカルに乗って、ヴァージンVSは踊る。A児がブリキの飛行機をとりだし飛びまわると、客席の少年少女も、いつのまにか飛行機をもって離陸している。

4月25日には、不思議の国のメッセージ第3弾シングル「夢のラジオシティ」を発表。5月には、藤田敏八監督映画「ダイヤモンドは傷つかない」の挿入歌として「サントワマミイ」が街々の映画館から流れ出す。ライブとコンサートのスケジュールも目じろおしてヴァージンVS、乗りに乗って、'82年の上空高く飛行中。

4月10日 安全地帯

プロフィール

雪解けの水といっしょにロックの響が聴こえる。むしろニューミュージック系のアーティストを多く輩出し、ロックはなかなか根づかないと言われてきた北海道に、待望の本格的R&Rバンドが登場した。安全地帯は旭川に独自のMFPスタジオを持ち、おもに札幌を中心のライブ活動で実力を磨いてきた。そして、2月25日、デビューシングル「萌黄色のスナップ」で、いよいよ東京へ乗り込んできた。

安全地帯が奏でるロックには、北海道独特の香りがただよっている。北海道の大地の広がりと素朴な温もり、開拓者のロマンが音に乗って聞こえてくる。玉置浩二のずばぬけたヴォーカル力と絶妙なアンサンブルが、北海道の広大な自然の息づきを伝えてくれる。日本のロック界が忘れていた、ロック＝魂の鼓動を、安全地帯が北風に乗ってとどけてくれた。

中心メンバーの玉置浩二と武沢豊は、旭川の中学校のクラスメイト。もう10年来のつきあいで、気の通じ合ったコンビネーションが、安全地帯独特の美しいメロディラインを産みだすのである。日本のロックを変えるパワーを秘めて、安全地帯、満を持してアルバム・レコーディング中。

4月18日 角松敏生

CITY POPとして完成度の高いL.A.録音の2ndアルバムも好評だった角松敏生・達郎ぽい(?)SOUNDの中にも彼独特のナイーブさが快ち良い。

海外の強力スタジオミュージシャンにもひけをとらない彼がLIVEで、どんなギターテクニックを見せてくれるか楽しみ!! 美しいオフィスレディにオススメデス！

4月27&28日 THE WOOD

スピーカーを通して音が流れてきた瞬間から、確実にザ・ウッドの世界が空間を支配していく。これは、事実だ。

大人の感性に導びかれた言葉の流れに、洗練されたサウンドが相乗されて、空間を形成していく。それは、都会的とか流行りのサウンドという概念からはほど遠い、ザ・ウッドのみが持ちうる音の世界だ。

「ワンス・フォーエバー」に次ぐ、彼らのセカンド・アルバム「ワルツ」も、その例外ではなかった。

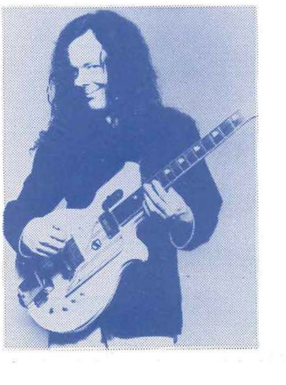
ロック、ソウル、ポップス、それにバラードなどというジャンルを超えて、さらにザ・ウッドの真髄に迫ったナンバーが、「ワルツ」の中には、確かにある。「鎮魂歌」や「ブルースを演ってくれ」などは、真に彼らの音楽的背景を如実に物語っているように感じた。そして、彼らの演りたかった方向性の一部分を垣間見た思いがしたのだ。

また、アルバム全体を通して、ザ・ウッドのサウンドを明確にしているのが、鈴木明男のサックス・プレイだ。流れるようなフレーズと同時に、ジャズ的な要素も多分に含んだフリー・フォームなプレイは、今では欠くことのできない存在だ。

それに今回のアルバムで特筆すべきことは、楠木恭介のソングライターとしての成長ぶりだ。以前から、彼のソウルフルなヴォーカルは定評のあるところだが、今回彼のペンによる「孤独Dancer」と「思い出を超えて」というナンバーには、真に彼のフェイヴァリット・アーチストでもあるダニー・ハザウェイをも彷ふつとさせる世界がある。

「ワルツ」—— セカンド・アルバムにして、これほどまでに完成されたアルバムもめずらしいのではないだろうか。そして耳にするたびに、新たな感動と出逢いに気付く。それは、ザ・ウッドが、まだ底知れぬ未知の部分を内包しているグループだからなのかもしれない

5/1 DAUID LINDLEY



ジャクソン・ブラウンやリンダ・ロンシュタット、クロスビー＆ナッシュ etc…。

彼のセッション・ミュージシャンとしてのキャリアは申し分ない。この所たて続けに自身のアルバムを2枚リリース。玄人節の評価も高く、何度も来日していることもあり、日本での人気も高い。